

あっちもこっちも猫だらけ！？

猫本紹介



『猫ぼんぼん』
～毛糸を巻いてつくる
個性ゆたかな動物～
著者:trikotri
出版社:誠文堂新光社



『家のネコと野生のネコ』
本文・写真解説:澤井 聖一
野生のネコ本文:近藤 雄生
出版社:エクスナレッジ

猫が好きすぎる！四六時中、猫といたい。できるなら学校へ連れて行って癒されたい。愛でたい。…でもムリだから“猫ぼんぼん”作っちゃお。我が家の猫ちゃんも、近所の猫ちゃんも、好きな猫ぼんぼんをたくさん作って持ち歩こう！

PN:ハンバーグほっぺちゃん

可愛い、カッコいい、美しい！様々な表情を見せてくれる猫の写真集！しかし、いわゆる普通の家猫だけではないのが本書。大きくて獰猛な猫！？滅多に見られないレアな猫！？家猫にはない野生の猫の魅力、家猫の伸びやかで可愛い魅力…どちらにもメロメロになること間違いなし！

PN:ライドゴリラ



ホラーセレクション10
『猫』
著者:エドガー・アラン・ポー他
出版社:ポプラ社

ホラーの動物と言えば“猫”というイメージを持つ方も多いのではないのでしょうか？本書では、そんな猫にまつわるホラー作品がぎゅっと集まっております！収録される作品は小説に落語、絵草紙にマンガまで！ジャンルは様々です！今では入手が難しい貴重な作品達を是非ご覧あれ！

PN:ゴリラA



『ゆきぐにのねこ』
～猫と人々の四季～
著者:寺本 成貴
出版社:出版ワークス

この本は、写真集で写っている猫がかわいいというだけではなく、少しの文と写真だけで四季の物語が語られているという所と、それぞれ春夏秋冬によって変わる猫とその綺麗な背景が見られる本になっています。体の柄が違う猫や、子猫、座っている猫、水を飲んでいる猫など、様々なかわいい猫の姿をみることができ一冊となっています。猫好きの方！見ないともったいない！

PN:クリスマスガール



『漱石先生の事件簿』
～猫の巻～
著者:柳広司
出版社:理論社

漱石が『吾輩は猫である』に仕掛けた謎とはいったい何でしょうか？探偵小説好きの“僕”の目を通して語られる六つの事件をお楽しみください。原作も読みたくなること間違いなし！

PN:うさぎ年ya!



『作家の猫』
編集:コロナ・ブックス編集部
出版社:平凡社

名だたる作家は猫が好き！？夏目漱石を始めとする作家たちの人生には猫が大きく関わっていた。作家と猫の自由気ままな日常を書いた一冊。

PN:Leo

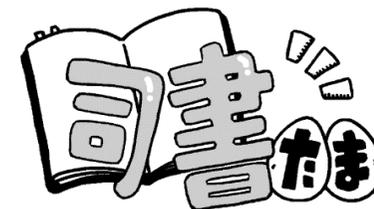
twitter



HP



Instagram



第27号

2023年2月20日
発行

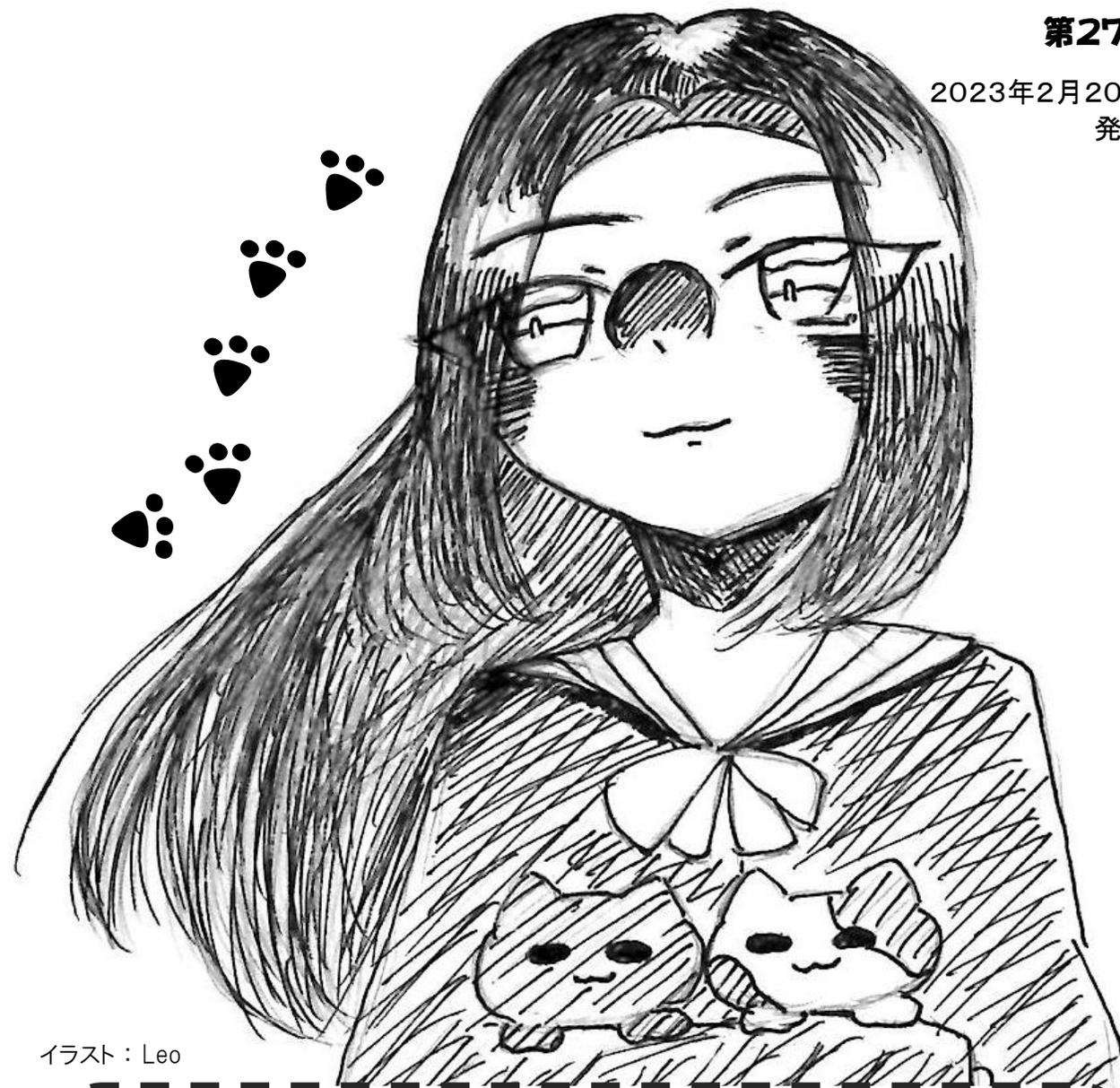


イラスト: Leo

YA Supporter Club 6期生募集

本が好き！図書館で何かしてみたい！イラストを描くのが好き！
そんな方は「YAサポータークラブ」に入って、一緒に活動しませんか？

【活動日】年11回 4月を除く第2日曜日 10:00～12:00

(内、6、10、12、2月の活動では自由参加の交流会を行います)

発行
YAサポーターズ
知多市立中央図書館
知多市岡田字宝ノ脇22番地
Tel(0562)55-4349
Fax(0562)55-2379
[HP] <https://www.lib.city.chita.aichi.jp>
[Twitter] 知多市立中央図書館
@chita_library

夏目漱石の猫に関する 本当にあった話



夏目漱石と言えば？と問えば必ず名前が挙がるであろう『吾輩は猫である』。
そんな皆様ご存知の主人公“吾輩”にはモデルとなった漱石の飼い猫がいます。

漱石の妻はその猫が死んでしまった時、
四角の墓標を買ってきて何か書いてほしいと漱石に頼んだそう。。。その墓標に漱石は「此の下に稲妻起る宵あらん」という追悼の句を書き残した。
さて、この句にはどのような意味が込められているのでしょうか...
皆さま、ぜひ漱石の気持ちになって考えてみてください。



夏目漱石は猫に**絶対に名前**を付けなかったそうで、
家族一同「ネコ」と呼んでいた。



命日には**一切れの鮭と鰹節**をかけた一杯のご飯が
お供えされた。

『吾輩は猫である』のモデルとなった**初代の猫**は
1908年9月13日、**漱石山房**にて病気で亡くなった。
その時、漱石は『三四郎』を執筆中。
その翌日、官製はがきに黒枠をつけ、**死亡通知**を門下生に書き送った。

著書である『吾輩は猫である』から皆様の中で
夏目漱石と言えば**猫のイメージ**が強いのではないのでしょうか？
しかし、当の本人である漱石、**実は犬派**であつたらしく、
「ヘクター」という名前を付けて飼っていたそう。



【参考】『作家の猫』編集:コロナ・ブックス編集部 出版社:平凡社
『夏目漱石博物館』著者:石崎等・中山繁信 出版社:彰国社
『作家の自伝24夏目漱石 監修:佐伯彰一、松本健一 出版社:日本図書センター』

その後

今まであったことを母と話した。
「ミケと再会でできてよかった。これからはちゃんとそばにいるからね。」母は言った。
「お母さんと再会でできてよかった。これからははぐれないようにする!!」ミケは言った。
「ずっと一緒にみんな仲良く。」
「どうか一緒にいられますように。」と強く願うふたりだった。

5

第26号 からの続き

僕は水の中から顔を出した。
『ここは?』
訳がわからず固まっているとぼつりぼつりと雨がふってきた。
『寒い!』
ぶるぶると震えながらこのままじゃ風邪をひくと思ひ、近くの建物に入ろうとしたとき、
「こんなところに・・・大丈夫。すぐに暖かいところに移動するから」
通りがかりの女性に抱きかかえられ家の中につれられた。
「捨てられて・・・かわいそうに、寒かったですよ」
タオルで体を拭かれながら、
「にゃーにゃーにゃー」（母を知りませんか。お散歩をしていたらはぐれちゃって）と言うと、
「はいはい。少しだけ待っててね」
と女性は言った。
僕は女性の後姿を見ながら近くにあった大きな布の塊に乗った。しばらくすると、僕は眠気に襲われた。

7

『ここは?』
見渡すと見慣れた風景が広がっている。
「お前も家出か?」
と見知らぬ男の子に拾われた。男の子は、姉とけんかをしたらしく、寒い中、一人で立っていた。すると、
「遥!!」
遠くから男の子のお姉さんだと思われる人物が走ってきた。
「ばか!!」
「ねえちゃん!」
「出てけ! って言われて本当に家出するやつがどこにいんの!」
「ごめん・・・」
「それより、家帰るよ。」
男の子、遥はどうやら仲直りできたみたいで、家に帰ることになった。
「猫抱えてるけど、どうしたの? この前も猫拾ってきたよね。その子、首輪ついてるよ」
「どこかの飼い猫だと思うけど、近くに来たからちょっとじゃれてた」
と言いながら僕を降ろした。
気になって僕が遥のあとを歩いていくと
「どうした?猫?俺んち来るか?」
振り返って遥が言った。
「にゃー」(うん!)僕は言った。
どうしても二人が気になったからだ。
「一日だけだぞ。」
そのあと遥に抱きかかえられ家に入ったとき。
『お母さん!』

時をかける子猫

~ TOKI WO KAKERU KONEKO ~

YASC連続創作小説

6

優しい歌声に目が覚めると、
「おはよう」
昨日僕を拾った女性が僕を見ていた。
「よかった。前の犬、つくねのために買ったベッドが役に立った」
『つくね?』
僕は食べ物をつくねを思い出した。
その瞬間、
「ぐーーー」
ものすごい音量で僕のおなかが鳴った。
「おなかすいたのね、ちょっと待ってて」
女性が持ってきたものは、おいしそうなおはん。
僕は一気にかぶりついた。
「そんなにあわてなくても・・・」
僕がご飯を食べ終わって一息ついた頃、
「自己紹介がまだだったわね。はじめまして、ひばりです」
そして、その女性、ひばりさんはこう言った。
「今日から、あなたはうちの家族ね!名前は『もふ』よ」

その日からひばりさんといろいろな所に行った。
ある日、ひばりさんと遊園地に行った帰り道。
「楽しかったね、また行こうか」
僕がひばりさんと話していたとき
「もふ!港だよ!!!」
ひばりさんがいきなり叫んできた。
「にゃッ!!!」(わあ!海だ!!!)
僕はひばりさんと港へ駆けていき、海を覗いた。
するとそこには綺麗な魚が泳いでいた。思わず手を伸ばした僕はそのまま海の中へ、
「ポチャン!」
「もふっ!!!」
遠くでひばりさんの声が聞こえた。

8

玄関に入った瞬間、すごくびっくりした。
目の前には野原で離ればなれになった母がいた。
『ミケ!!!』
母に僕の本名を呼ばれた。母との突然の再会にびっくりしたが、うれしかった。
また、ぼつりぼつりと雨が降ってきた、でも、もう寒くない。なぜならば、そこに母がいる。間違いはない。
雨の隙間にかすかな陽光を見つけた。

PN:クリスマスガール

※この物語はフィクションです。実際の人物とは関係ありません。